九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

対人関係における親密さとスキンシップ許容度 : 韓国人大学生の分析結果を中心に

曺, 美庚
神戸大学大学院文化学研究科

https://doi.org/10.15017/17113

出版情報：比較社会文化. 16, pp.73-85, 2010-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『比較社会文化』第16巻（2010）73～85頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.16（2010), pp.73～85

論　文

対人関係における親密さとスキンシップ許容度

―韓国人大学生の分析結果を中心に―

2009年11月9日受付，2009年12月17日受理

曺　美庚
CHO Mikyung

Keywords：対人関係、親密さ、スキンシップ許容度、同性同士、異文化

概　要

本研究は、韓国人大学生の対人関係における親密さとスキンシップ許容度について調査・分析し、韓国文化に対する異文化理解を促すことを目的としている。対人関係において親密感が高い相手とは密接距離を維持し、親密感の薄い相手とは個体距離を維持するという既存研究、ならびに密接距離帯あるいは個体距離帯にいる同性同士では、男性より女性のほうがスキンシップの機会やスキンシップ部位が広いという既存研究より、親密感の高低と性別によってスキンシップに対する許容度に相違があるという仮説を導いている。具体的には、親密感の高い相手の場合、密接距離を維持する関係上スキンシップをとる傾向も強いであろうと考え、親密感の高低がスキンシップ許容度に影響するという仮説を導き、仮説の検証を試みた。また、女性同士のスキンシップに対する許容度が男性同士のスキンシップに対する許容度より高いであろうという仮説については、自分と他者、あるいは他者と他者のいずれにおいても女性同士のスキンシップに対する許容度が高く示され、当該仮説が検証された。なお、今回の調査・分析により、仮説検証のみならず、韓国人大学生は全体的にスキンシップ許容度が高いこと、女性同士のスキンシップに対する女子学生の許容度がとりわけ高いことなどが明らかになった。

1　研究の背景と目的

日本と韓国は地理的に非常に近接しており、2002年のサッカーのワールドカップ共催やドラマ「冬のソナタ」放映を機に両国間の心理的な距離もぐんと縮んだように思われる。韓国における日本大衆文化の解禁と日本における韓流ブームにより、今では互いの文化的な交流も盛んであり、個人レベルや民間レベルで互いに親近感をもって理解しあう努力がなされている。ただ、両国はいろんな面で似通っているため、互いが受け入れやすいという面もあるものの、お互いの文化や習慣に対する認識や理解はいまだ不十分であり、実際のコミュニケーション現場では、多様なコミュニケーション・トラブルが生じているのも事実である。

2009年秋のある日、筆者が韓国ソウルで開催されたある国際学会に参加した後、ホテルへ向かう電車の中での出来事であった。筆者はパソコンなどが入った書類カバンと学会で購入した何冊かの本が入った手提げ袋を持って電車内で立っていた。揺れる電車内で結構荷物が重いなと思っていた時、筆者の前の席に座っていた中年男性が筆者の手提げ袋をそっと引っ張ったのである。筆者は反射的に身を引いたが、すぐに感謝の笑みと共に「大丈夫ですよ」と丁重に断った。男性側からすれば、重い荷物を持って立っている人に対して荷物だけでも持ってあげようとする思いやりの行動である。内心、このような文化を直接体験できて非常に嬉しかった。急速な経済発展と個人主義の浸透により、近年はあまり見かけなくなった光景と言われていたからである。もっとも、ゼミ生や何人かの知り合いも韓国で類似の場面に直面したことがあるという。

例えば、道を尋ねている日本人旅行者（2007年当時27歳のOL）が、中年女性に手を引っ張られながら親切に道を教えてもらったとか、若い大学生（2006年当時20歳の男子大学生）が公衆電話の掛け方を聞いたら、50代の韓国人の男性は彼の肩を組んだまま公衆電話の使い方を教えてくれたとか、満員電車の中で重そうなカバンを持って立っている日本人学生（2005年当時19歳の女子大学生）のカバンを座っていた韓国人の中年女性が持ってあげようとしたケースな

どがそのような場面である。これらのケースはいずれも、日本人にとっては恐怖感として記憶される異文化体験の一つであるようだ。さらに、韓国ではよく見かける光景であるが、女性同士が手をつないで歩いたり、腕を組んで歩いている様子を見ると、日本人は「もしや同性愛者かな？」と思うようである（2008年当時23歳の男子大学院生）。

逆に、親密感や嬉しさを表現するために軽く相手の体にタッチした時、ビックリして避ける友人に傷ついたという韓国人留学生(2008年当時25歳の女子大学院生)、申し訳なさや感謝の気持ちを伝えるために手を握ったら変に思われて傷ついたという韓国人留学生（2006年当時28歳の男子大学院生）の話などのように、コミュニケーション現場で起こっているコミュニケーション・トラブルについてよく耳にする。韓国人が親密感や好意を持って円滑なコミュニケーションを図るために行った行為が、日本人にとっては脅威や嫌悪感をもたらすものであったり、タブーに該当する場合がある。一度、このようなコミュニケーション・トラブルの場面に遭遇すると、お互いが傷つくことになり、なかなか元の状態に修復できなくなる恐れがある。

日本人と韓国人の間でコミュニケーションのとり方や感情表現の方法には若干相違がある。韓国人は日本人に比べて喜怒哀楽の感情をより直接的に表現していると言われているのに比べ、日本人は感情を間接的に表現する傾向が強い。これらの感情表現に関する研究は、社会学の分野などで試みられつつあるものの、検証できるような実証的なデータや論文はあまり見当たらない。そこで、本研究では、コミュニケーションのあり方が異文化間コミュニケーションの成否に大いに影響を及ぼすと考え、個人のコミュニケーション距離と深い関わりを持つスキンシップの程度や許容度について考察する。特に、韓国の大学生の同性同士のスキンシップに対する許容度を調査・分析し、実証的なデータを示すことで、異文化理解を深めることにしたい。本研究によって提示される各種のデータは、日韓の異文化間コミュニケーションの円滑化にも多いに貢献できるであろう。

2　これまでの研究と仮説

人間の親密さや対人距離に関する研究としては、Little（1965)、マレービアン（1986)、Hall（1969）などの研究が挙げられる。Little（1965）やマレービアン（1986）の研究では、対人関係の親密さが増すほど対人距離が近くなることを明らかにしている。Hall（1969）の研究では、対人関係と距離には相関があるとし、対人関係における距離を、「密接距離」、「個体距離」、「社会距離」、「公衆距離」の4つに区分している（表1)。

表1　対人関係と距離区分

距離区分	特　徴	実測値 cm
密接距離	親密なもの同士が取る距離。相手のぬくもりや息づかいが感じ取れる。	0-46
個体距離	相手に手が届くぐらいの距離。やや小さめの声で個人的な話がなされることが多い。	46-122
社会距離	一般的な会話が行われる距離。普通あるいはやや大きめの声で話がなされることが多い。	122-366
公衆距離	ビジネスやより正式な場で取られる距離。大きな声で話されることが多い。	366以上

（出所：Hall(1969)，池田・クレーマー(2000)，p. 71より再引用）

一方、韓国人のコミュニケーション距離について言及した曺（2001）では、「ゼロ・ディスタンス論」が提唱された。そこでは、韓国人は歩きながら又は隣に座って話をする時、言語以外にボディ・タッチ（スキンシップ）を伴うコミュニケーション方法をとることが多いとしている。また、親密感の高い人ほど対人距離が短く、肩や腕あるいは手などの体の一部を軽くタッチしたり、手をつないだり、腕を組んだり、ハグをするなどのスキンシップが多用される傾向が強いとしている。

本研究では、表1のうち、とりわけ「密接距離」と「個体距離」に注目している。いずれも物理的にスキンシップが可能な距離であるものの、相手との距離がより短い密接距離の場合、心理的・物理的に相手とのスキンシップが行われやすいことが容易に推測できる。上記の既存研究から、相手との親密さの度合いが高いほど密接距離になりやすいこと、また密接距離になるほどスキンシップの可能性が高まることなどが示唆される。そこで、親密さとスキンシップに関わる次の仮説を導くことができる。

仮説1：相手に対し親密感が高いほどスキンシップ許容度が高い。

次に、Jourard（1966）は、親密さと身体接触経験や身体接触部位について調査し、親や友人間では身体の末端に触れられることが多いのに対して、異性の友人間では体の中心部に触れられているとし、親密な関係ほど体に触れられる機会や範囲が広いことを明らかにした(図1)。本研究では、とりわけ同性間のスキンシップに注目している。同性間のスキンシップという観点から図1を考察すると、同性間の身体接触の場合（父親→男性、男の友人→男性；母親→女性、女の友人→女性)、男性より女性の方が濃い色で表

される部分が広く、身体接触の機会と範囲が広いことを示唆している。

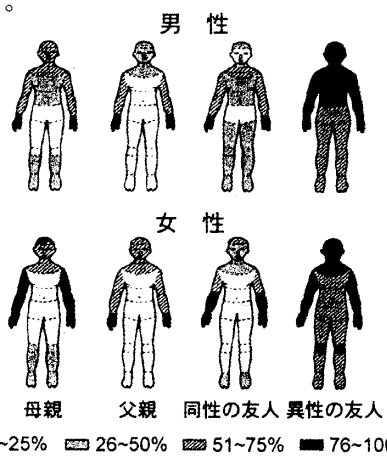

図1　身体接触の部位－両親、同性・異性の友人によって触れられた領域

（出所：Jourard（1966），大坊（1998），p. 48より再引用）

一方、日本人大学生を調査した曺（2008）においては、男子学生より女子学生のほうがスキンシップ許容度が高いことが報告されている。男女間のスキンシップの様子の違いを示唆したJourard（1966）ならびに曺（2008）の研究より、スキンシップ許容度の性別差を検証するための次の仮説を導くことができる。

仮説2：女性同士のスキンシップに対する許容度が男性同士のスキンシップに対する許容度より高い。

その他の関連研究として、Argyle and Dean（1965）の研究が挙げられるが、彼らは視線交差時間を分析し、親密さを表すチャンネルの間の関係は相補的であるとし、親和葛藤理論（affiliative conflict theory）を提唱している。

3　質問票調査の概要と分析

3.1　質問票調査の概要

本調査は、韓国の釜山大学、慶北大学、大邱カトリック大学の学生を対象に2007年11月末から2008年3月下旬までの間に行われた。200部の質問票を配布し、196部を回収したので、回収率は98%である。そのうち、中国国籍のものが5部、回答記録もれによる欠損が2部あり、189部が有効な回答部数であった。回答者の男女比率は、男子大学生が117名（61.9%）、女子大学生が71名（37.6%）を占め、性別不明の回答が1名あり、性別による分析時には欠損として処理された。女子学生の回答比率が相対的に少ないことから、男女比率に若干のアンバランスがあったといえる（表2）。

表2　回答者の男女比率

	男子大学生	女子大学生	性別不明	合計
有効回答数	117	71	1	189
比率	61.9%	37.6%	0.5%	100%

なお、スキンシップ許容度を測定するに当たっては、親密度合いによって、親密感の高いグループと親密感の薄いグループを区分している。前者には、「親、兄弟・姉妹、親友、親しい先輩・後輩」が含まれ、Hall（1969）のいう「密接距離」の区分に概ね対応している。後者には、「普通の友人、普通の先輩・後輩、知り合い程度の人」が含まれ、Hall（1969）のいう「個体距離」の区分に概ね対応している。また、分析方法としては、親密度合いによる分析をベースにしながら、性別による許容度の相違をも考察している。

3.2　同性の他者と「手をつなぐ」行為に対する許容度

回答者本人と同性の他者（自分と他者間）が歩きながら話をしたり隣に座って話をするとき、回答者本人が「手をつなぐ（手に触れるなども含む）」行為に対してどの程度許容できるかを調べたところ、表3のような結果が得られた。

表3　同性の他者と「手をつなぐ」行為に対する許容度

	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
親との場合	18 (9.5)	37 (19.6)	29 (15.3)	37 (19.6)	68 (36.0)	189 (100)
兄弟・姉妹	25 (13.2)	33 (17.5)	29 (15.3)	52 (27.5)	50 (26.5)	189 (100)
親友の場合	29 (15.3)	34 (18.0)	26 (13.8)	40 (21.2)	60 (31.7)	189 (100)
親しい先輩・後輩	32 (16.9)	45 (23.8)	47 (24.9)	38 (20.1)	27 (14.3)	189 (100)
普通の友人	46 (24.3)	42 (22.2)	36 (19.0)	52 (27.5)	13 (6.9)	189 (100)
普通の先輩・後輩	49 (25.9)	55 (29.1)	45 (23.8)	32 (16.9)	8 (4.2)	189 (100)
知り合い程度の人	70 (37.0)	62 (32.8)	35 (18.5)	16 (8.5)	2 (3.2)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、（ ）内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

「親、兄弟・姉妹、親友」などの親密感の高いグループの他者と同性間で手をつなぐ行為に対しては、「やや自然に思う」ないし「全く自然に思う」と回答した比率が非常に高く、両者を合わせると、「自然に思う」比率が各々50%を

上回っている。同性間で手をつなぐというスキンシップ行為が何の問題もなくごく自然に許容されていることがうかがえる。逆に、「普通の先輩・後輩、知り合い程度の人」などの親密感の薄いグループの他者と同性間で手をつなぐ行為に対しては、「やや不自然に思う」ないし「全く不自然に思う」と回答した比率が50%を上回るほど高く示された。これらの結果から、親密感の高低と同性間のスキンシップに対する許容度との間には明らかに相関があるといえる。

調査結果から、韓国人の大学生にとって、親密な関係にある同性の他者と「手をつなぐ」行為はごく普通の行為であり、自然なものとして受け入れられている傾向が読み取れる。韓国人のこのような考え方は、「同性間で手をつなぐ行為は一般的に好ましくなく許容されにくい」と考えている日本人大学生にとっては理解しがたい面があると思われる。なお、「親しい先輩・後輩」や「普通の友人」の場合は、それぞれ、親密感の高いグループの端と親密感の薄いグループの端に位置し、許容度に関する分布がやや分散した形で表れている。また、知り合い程度の人と「手をつなぐ」ことに対しては「不自然に思う」と回答した比率が約70%（132名）となっている（図3）。

「手をつなぐ」行為を許容する順位としては、「まったく自然」と「やや自然」の回答をあわせて「自然に思う」比率が高い順に並べると、親、兄弟・姉妹、親友、親しい先輩・後輩、普通の友人、普通の先輩・後輩、知り合い程度の人の順となっており、親密感の度合いとスキンシップ許容度との間には明らかに相関が認められる。とりわけ、親や兄弟・姉妹と手をつなぐ行為に対して許容度がもっとも高いことから、韓国人の家族間の親密感とその表現方法としてのスキンシップの様子がうかがえる（図2）。

注）%の場合、小数点以下を四捨五入で表示している。以下同じ。

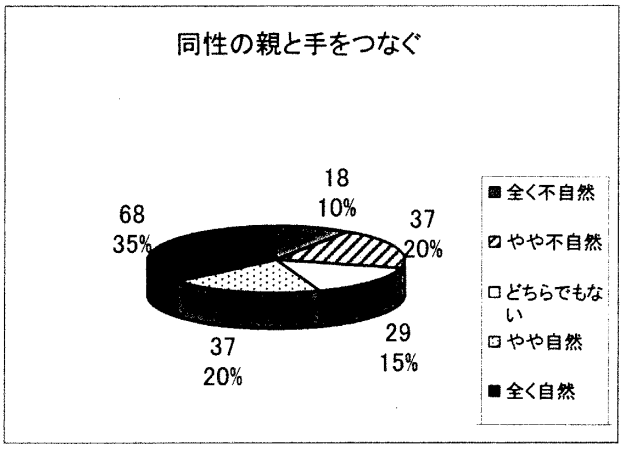

図2　同性の親と「手をつなぐ」

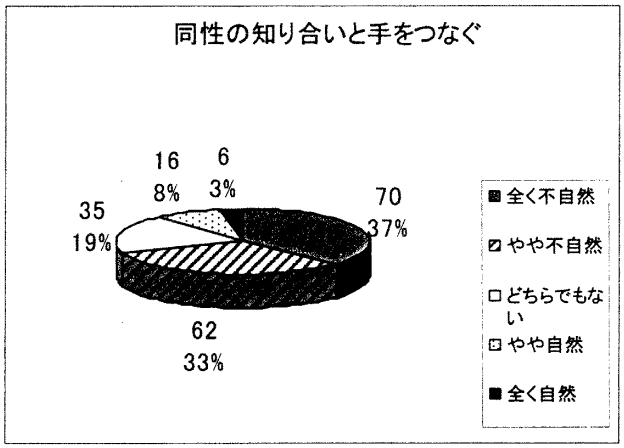

図3　同性の知り合い程度の人と「手をつなぐ」

表4　性別による「手をつなぐ」行為に対する許容度

	男子大学生		女子大学生		t
	n	平均（標準偏差）	n	平均（標準偏差）	
親との場合***	117	3.01 (1.33)	71	4.38 (1.05)	-7.849
兄弟・姉妹***	117	2.79 (1.31)	71	4.31 (0.90)	-9.409
親友の場合***	117	2.67 (1.35)	71	4.48 (0.81)	-11.503
親しい先輩・後輩***	117	2.49 (1.23)	71	3.59 (1.12)	-6.329
普通の友人***	117	2.26 (1.23)	71	3.41 (1.04)	-6.889
普通の先輩・後輩***	117	2.15 (1.13)	71	2.92 (1.09)	-4.581
知り合い程度の人*	117	1.95 (1.10)	71	2.28 (1.04)	-2.079

注1）性別表示無しの回答1つを欠損処理し、総数が188となっている。

注2）有意水準の表示は下記のとおりである。
*** $p<0.001$、** $p<0.01$、* $p<0.05$、† $p<0.1$

注3）5点リッカート・スケールは下記の通りである。
1：まったく不自然　　2：やや不自然
3：どちらともいえない　4：やや自然
5：まったく自然

表4は「手をつなぐ」行為に対する許容度を性別間で比較したものである。「手をつなぐ」行為に対する許容度については、調査した全ての項目において、男子学生より女子学生の方が許容度が高く、その差は統計的にも有意なものとなっている。注目すべき点は、男子学生の場合、他のどの相手よりも父親と手をつなぐことがもっとも許容度が高いことである。女子学生の場合は、母親に対して4.38、姉妹に対して4.31、親友に対して4.48の許容度を示しており、母親よりも親友に対しての許容度が若干高く表れた。男子学生は親友より親の方が同性間で「手をつなぐ」行為を許容しやすい相手ととらえている反面、女子学生にとっては、親、姉妹、親友の区別がほとんどなく、この3者のいずれをも「手をつなぐ」行為を許容しやすい相手としてとらえていることになる。女子学生にとって、親友に対する許容

度が親や姉妹と同じレベルであるということは、親友と「手をつなぐ」機会や一緒に過ごす機会が多いことを示唆している。以上の結果をグラフにしたのが図4である。グラフからは、「手をつなぐ」行為に対する許容度の男女差がはっきりと読み取れる。すなわち、男子学生より女子学生の方が全般的に「手をつなぐ」行為に対する許容度が高く、親密感の高い相手ほど許容度も高いといえよう。

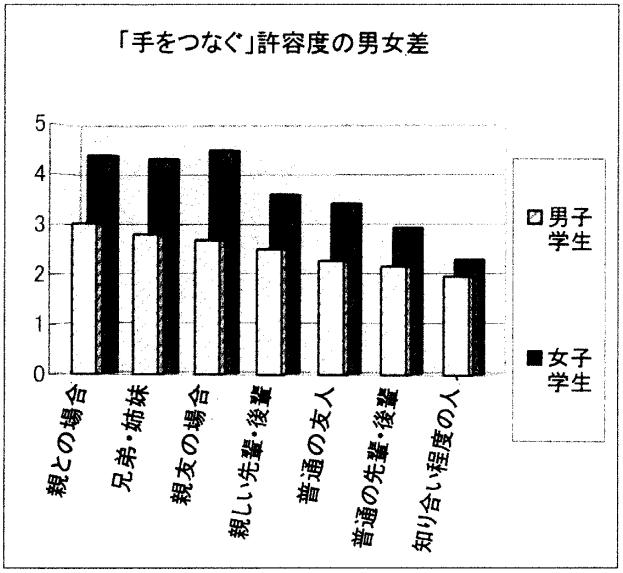

図4　「手をつなぐ」行為に対する許容度（グラフ）

3．3　同性の他者と「腕を組む」行為に対する許容度

次に、「腕を組む」行為に対する許容度について考察してみよう。歩きながら話をしたり隣に座って話をするとき、「腕を組む」行為に対してどの程度許容できるかを調べたところ、表5のような結果が得られた。

表5　同性の他者と「腕を組む」行為に対する許容度

	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
親との場合	39 (20.6)	23 (12.2)	24 (12.7)	40 (21.2)	63 (33.3)	189 (100)
兄弟・姉妹	40 (21.2)	28 (14.8)	28 (14.8)	37 (19.6)	56 (29.6)	189 (100)
親友の場合	57 (30.2)	24 (12.7)	20 (10.6)	24 (12.7)	63 (33.3)	188 (99.5)
親しい先輩・後輩	53 (28.0)	37 (19.6)	30 (15.9)	34 (18.0)	35 (18.5)	189 (100)
普通の友人	67 (35.4)	30 (15.9)	34 (18.0)	47 (24.9)	11 (5.8)	189 (100)
普通の先輩・後輩	69 (36.5)	43 (22.8)	36 (19.0)	31 (16.4)	10 (5.3)	189 (100)
知り合い程度の人	87 (46.0)	47 (24.9)	33 (17.5)	13 (6.9)	9 (4.8)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、（　）内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

同性の他者と「腕を組む」行為に対する許容度は、「手をつなぐ」行為に対する許容度に比べ若干低い数値を示しているものの、全般的にほぼ同じ結果であるといえる。すなわち、同性の他者と「腕を組む」行為に対する許容度においても、「手をつなぐ」行為に対する許容度と同様に、親と「腕を組む」行為に対する許容度がもっとも高く示され、「やや自然に思う」と「全く自然に思う」を合わせた比率が54.5%（103名）と、半数以上の人が自然に思っていることが分かる。反面、「やや不自然に思う」と「全く不自然に思う」を合わせた比率は32.8%（62名）であった（表5、図5）。知り合い程度の人と「腕を組む」ことに関しても、「手をつなぐ」行為の場合と同様に、「全く不自然に思う」と「やや不自然に思う」を合わせで70.9%（134名）が不自然であると答えた反面、自然であると答えた人は、「全く自然に思う」と「やや自然に思う」を合わせて11.7%（22名）に過ぎなかった（表5、図6）。

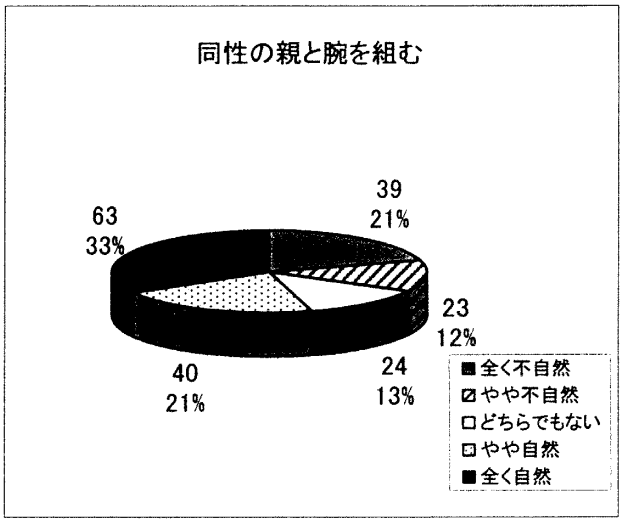

図5　同性の親と「腕を組む」

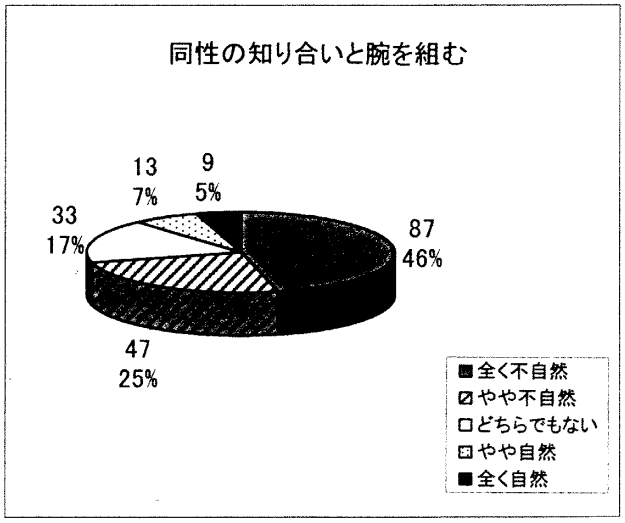

図6　同性の知り合い程度の人と「腕を組む」

なお、表6と図7にみるように、「腕を組む」行為に対する許容度については、調査した全ての項目において、男子学生より女子学生のほうが許容度がかなり高く表れ、統計

的にも性別差が認められた。とくに、親友と「腕を組む」行為に対する許容度において、男女差がもっとも顕著に表れている。「手をつなぐ」行為に対する許容度の男女差を示す表4と、「腕を組む」行為に対する許容度の男女差を示す表6を比較すると、すべての相手に対し、「手をつなぐ」行為よりも「腕を組む」行為に対する許容度が男子ではより低く、女子ではより高くなっている。こうした結果から、男子学生の場合、同性の他者と「腕を組む」より「手をつなぐ」ほうが相対的に容易である反面、女子学生は「腕を組む」ほうが相対的に気楽であると感じているといえる。

表6　性別による「腕を組む」行為に対する許容度

	男子大学生		女子大学生		t
	n	平均（標準偏差）	n	平均（標準偏差）	
親との場合***	117	2.63 (1.42)	71	4.51 (0.91)	−11.018
兄弟・姉妹***	117	2.47 (1.37)	71	4.44 (0.84)	−12.173
親友の場合***	117	2.15 (1.36)	71	4.56 (0.90)	−14.545
親しい先輩・後輩***	117	2.16 (1.31)	71	3.82 (1.16)	−9.023
普通の友人***	117	1.87 (1.16)	71	3.49 (0.95)	−10.410
普通の先輩・後輩***	117	1.90 (1.13)	71	2.99 (1.19)	−6.195
知り合い程度の人***	117	1.72 (1.08)	71	2.44 (1.16)	−4.235

注1）性別表示無しの回答1つを欠損処理し、総数が188となっている。
注2）有意水準の表示は下記のとおりである。
*** $p<0.001$、** $p<0.01$、* $p<0.05$、† $p<0.1$
注3）5点リッカート・スケールは下記の通りである。
1：まったく不自然　2：やや不自然
3：どちらともいえない　4：やや自然
5：まったく自然

3．4　同性の他者と「肩を組む」行為に対する許容度

次に、歩きながら話をしたり、近くに座って話をするとき、同性の他者と「肩を組む」（肩や腰に軽く手を当てる行為を含む、以下同じ）行為に対する許容度を調査した結果、表7のような結果が得られた。親密感の高いグループと親密感の薄いグループの間の許容度の差は、同性の他者と「手をつなぐ」行為や同性の他者と「腕を組む」行為の場合と大差がなく、ほぼ同様の結果を示し、親密感の高低と許容度との間には密接な関係があることが確認された。但し、全体的な許容度において、同性の他者と「手をつなぐ」行為や同性の他者と「腕を組む」行為に比べて許容度がやや高く示されたことと、許容されやすい順位が変化している

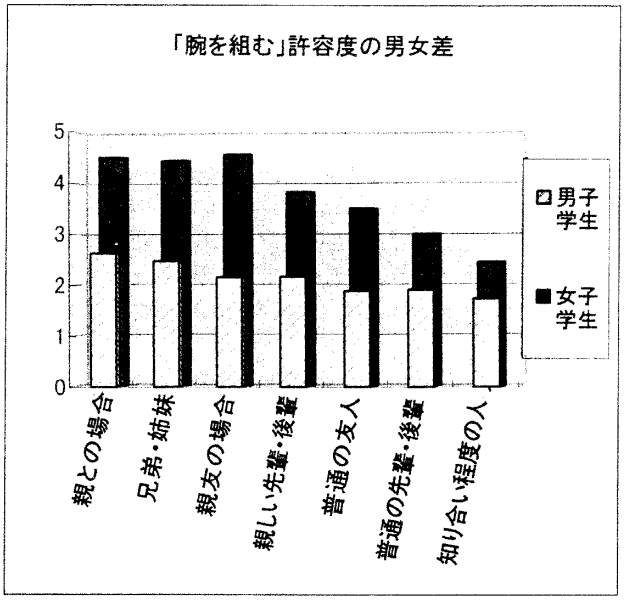

図7　「腕を組む」行為に対する許容度（グラフ）

ことに注目したい。「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為に対する許容度の順位は、「親」、「兄弟・姉妹」、「親友」、「親しい先輩・後輩」の順となっている。しかし、「肩を組む」行為に対しては、「親友」の場合における許容度がもっとも高く、次いで「兄弟・姉妹」、「親しい先輩・後輩」、「親」の順に許容されていることがわかる。なお、「普通の友人」、「普通の先輩・後輩」、「知り合い程度の人」に対する許容度においても、「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為より概ね許容度が高くなっている。

表7　同性の他者と「肩を組む」行為に対する許容度

	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
親との場合	25 (13.2)	35 (18.5)	40 (21.2)	39 (20.6)	50 (26.5)	189 (100)
兄弟・姉妹	13 (6.9)	24 (12.7)	44 (23.3)	53 (28.0)	55 (29.1)	189 (100)
親友の場合	13 (6.9)	21 (11.1)	36 (19.0)	57 (30.2)	62 (32.8)	189 (100)
親しい先輩・後輩	15 (7.9)	31 (16.4)	53 (28.0)	53 (28.0)	37 (19.6)	189 (100)
普通の友人	24 (12.7)	46 (24.3)	63 (33.3)	44 (23.3)	12 (6.3)	189 (100)
普通の先輩・後輩	29 (15.3)	52 (27.5)	62 (32.8)	37 (19.6)	9 (4.8)	189 (100)
知り合い程度の人	52 (27.5)	64 (33.9)	48 (25.4)	16 (8.5)	9 (4.8)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、（ ）内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

具体的に、同性の親友と「肩を組む」行為については、「まったく自然に思う」人が全体の32.8%（62名）で、「やや自然に思う」人の30.2%（57名）を含めると、63%（119

名）もの人が「肩を組む」行為を許容しており、同性の他者間でのスキンシップのうちもっとも高い許容度を示している。兄弟・姉妹と「肩を組む」行為についても、57.1%（108名）もの人が「まったく自然に思う」や「やや自然に思う」と回答しており、かなり高い許容度となっている。この結果を表3や表5と比べると、全般的に「肩を組む」（軽く手をのせる）行為が「手をつなぐ」や「腕を組む」行為よりも許容されやすい様子がうかがえる。

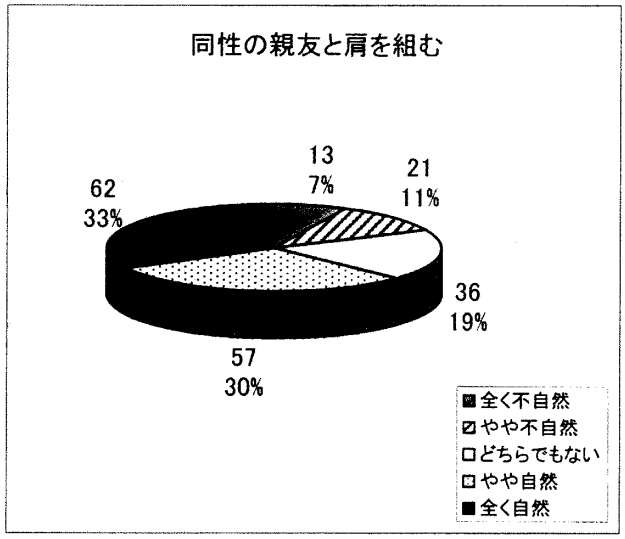

図8　同性の親友と「肩を組む」

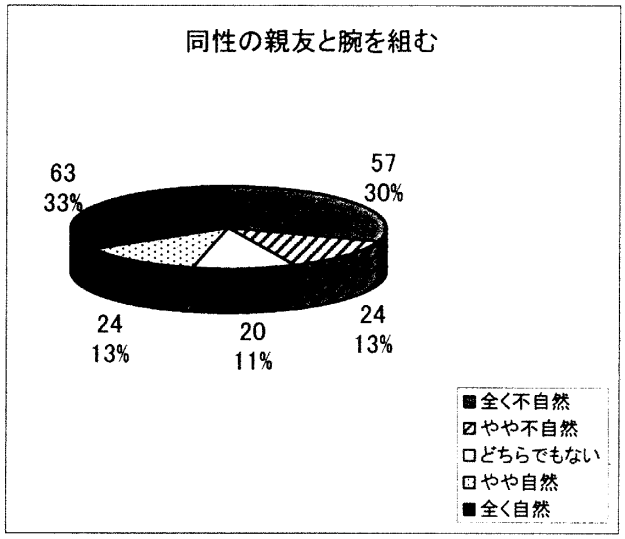

図9　同性の親友と「腕を組む」

また、図8と図9から、親友との間では「腕を組む」行為より「肩を組む」行為の方が許容されやすいといえるが、この現象をさらに詳細に分析してみると、「肩を組む」行為に対する許容度を高めているのは男子学生であることが分かる。図10と図11から、男子学生の場合、「腕を組む」行為に対しては「不自然」の方に大きく傾いていた分布が、「肩を組む」行為では逆に「自然」の方に偏った分布となっており、こうした男子学生の回答の分布の変化がそのまま全体としての許容度に影響しているのである。

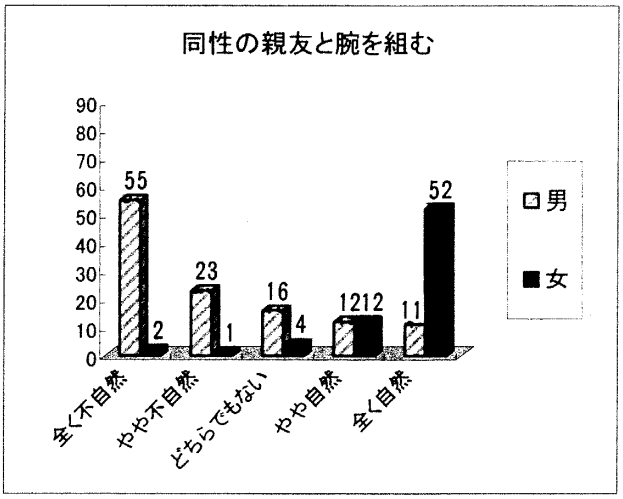

図10　親友と「腕を組む」行為に対する許容度の男女差

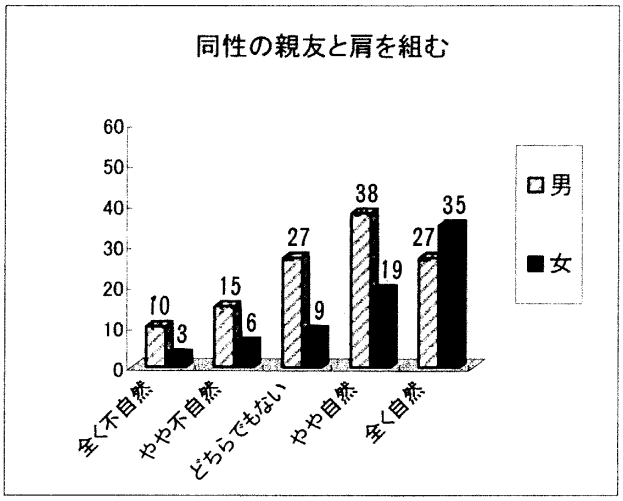

図11　親友と「肩を組む」行為に対する許容度の男女差

男子学生の場合、例えば、飲み会などで、酔った勢いやその場の雰囲気により肩を組むことがあることから、同性の他者と「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為に比べ、同性の他者と「肩を組む」行為に関しては、自然な行為として受け入れられ、許容度が増加したと考えられる。このことは男女差を比較した表8からも読み取れる。既述したように、「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為においては、すべての相手に対して男女の間で許容度に大きな差が開いていたが、「肩を組む」行為に対する許容度においては、「親、兄弟・姉妹、親友、普通の友人」の場合を除き、男子学生と女子学生の間に統計的な有意差は表れなかった。男子学生に「肩を組む」行為が自然な行為として受け入れられた結果、女子学生との差が縮み、「肩を組む」行為に対する許容度では男女差が僅差になったことを物語っている。

表8　性別による「肩を組む」行為に対する許容度

	男子大学生		女子大学生		t
	n	平均（標準偏差）	n	平均（標準偏差）	
親との場合***	117	2.98 (1.29)	71	3.77 (1.41)	-3.864
兄弟・姉妹***	117	3.32 (1.19)	71	4.06 (1.14)	-4.228
親友の場合**	117	3.49 (1.22)	71	4.06 (1.16)	-3.200
親しい先輩・後輩	117	3.23 (1.13)	71	3.54 (1.29)	-1.645
普通の友人†	117	2.74 (1.12)	71	3.06 (1.07)	-1.966
普通の先輩・後輩	117	2.67 (1.09)	71	2.76 (1.10)	-0.569
知り合い程度の人	117	2.32 (1.16)	71	2.21 (1.00)	-0.711

注1）性別表示無しの回答1つを欠損処理し、総数が188となっている。
注2）有意水準の表示は下記のとおりである。
*** p<0.001、** p<0.01、* p<0.05、† p<0.1
注3）5点リッカート・スケールは下記の通りである。
1：まったく不自然　2：やや不自然
3：どちらともいえない　4：やや自然
5：まったく自然

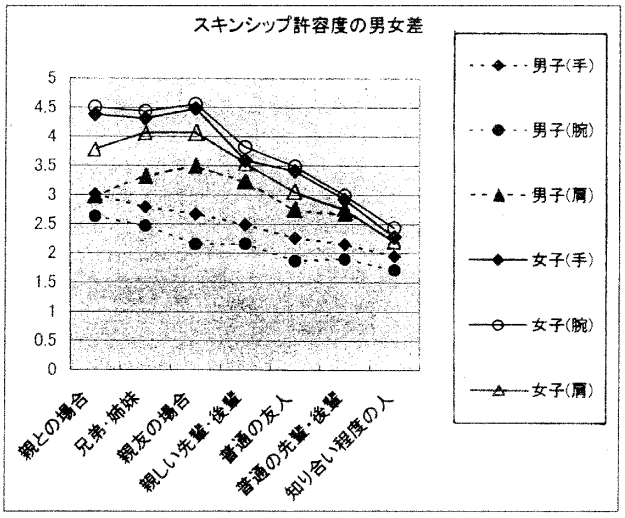

図12　スキンシップに対する許容度の男女差
（自分と同性の他者間）

これまでの分析結果を総合すると、図12のようにまとめることができる。図12から、韓国人大学生は、同性の他者と「手をつなぐ」、「腕を組む」、「肩を組む」といったスキンシップにより、非言語的コミュニケーションを行うことに対しては全体的に「自然に思う」傾向が強いといえよう。特に女子学生の場合は、親密感の高いグループと親密感の低いグループに対する許容度において明確な差があり、その差はグラフ上でもはっきりと表れている。一方、男子学生においては、「手をつなぐ」行為と「腕を組む」行為に対して、似通った許容度が示されているとともに、親密感の高いグループと親密感の低いグループにおける差は緩やかなものとなっている。ただ、「肩を組む」行為に対しては、「手をつなぐ」や「腕を組む」行為に比べ、許容度がかなり高めに推移している。

3．5　同性の他者間のスキンシップ行為に対する許容度

これまでは、自分が同性の他者と「手をつなぐ」、「腕を組む」、「肩を組む」などのスキンシップをとる場合の許容度を分析したが、ここからは、同性の他者間で「手をつないだり、腕を組んだり、肩を組んだり」して歩いたり話をしている場面をどの程度受け入れられるかについて考察する。質問項目を「男性同士」と「女性同士」の場合に分けて調査を行った結果、男性同士（他者と他者間、以下「他他」と表記）のスキンシップと、女性同士（他他）のスキンシップに対して異なる許容度が示された。

分析の詳細をみると、表9のとおりである。まず、同性同士（他他）が「手をつなぐ」行為に対する許容度は、女性同士（他他）の行為に対しては「自然に思う」人が60.9%（115名）、「不自然に思う」人が15.9%（30名）となっており、半数以上の人が女性同士（他他）が「手をつなぐ」行為を許容していることがわかる。反面、男性同士（他他）が「手をつなぐ」行為に対しては、「不自然に思う」人が85.2%（161名）を占め、男性同士（他他）の「手をつなぐ」行為に対して非常に厳しい見方をしていることが分かる。

表9　同性同士（他他）が「手をつなぐ」行為に対する許容度

他者行為	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
男性同士	111 (58.7)	50 (26.5)	19 (10.1)	5 (2.6)	4 (2.1)	189 (100)
女性同士	10 (5.3)	20 (10.6)	44 (23.3)	65 (34.4)	50 (26.5)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、（ ）内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

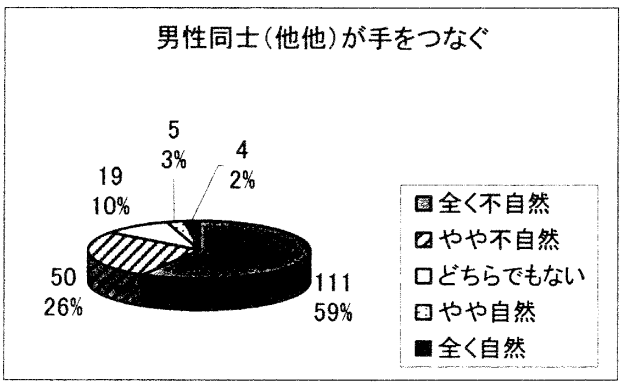

図13　男性同士（他他）が「手をつなぐ」

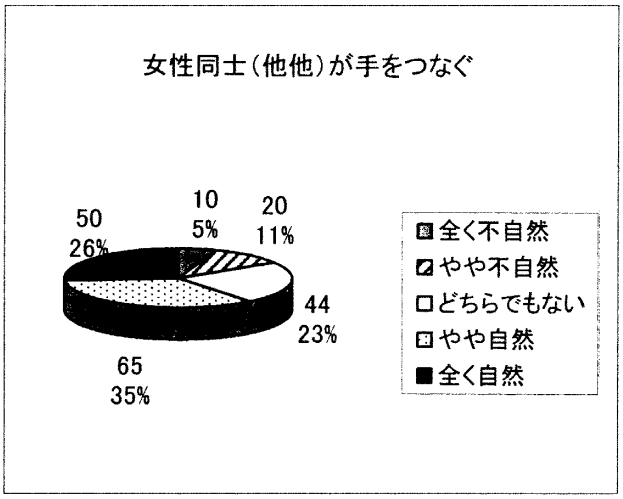

図14　女性同士（他他）が「手をつなぐ」

次は、同性同士（他他）が「腕を組む」行為についての考察である。表10にみるように、女性同士（他他）の行為については、「自然に思う」人が63.5%（120名）、「不自然に思う」人が15.9%（30名）であり、上記の「手をつなぐ」行為に対する許容度よりも若干高い許容度が示された。また、男性同士（他他）の行為については、「不自然に思う」人が87.8%（166名）で、上記の「手をつなぐ」行為よりもさらに許容されにくいことが分かった。女性同士（他他）については、「手をつなぐ」行為より「腕を組む」行為の方が受け入れられやすい行為である反面、男性同士（他他）については、「腕を組む」行為の方がより受け入れがたい行為であるといえよう（図13〜図16）。

表10　同性同士(他他)が「腕を組む」行為に対する許容度

他者行為	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
男性同士	118 (62.4)	48 (25.4)	17 (9.0)	3 (1.6)	3 (1.6)	189 (100)
女性同士	13 (6.9)	17 (9.0)	39 (20.6)	56 (29.6)	64 (33.9)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、( )内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

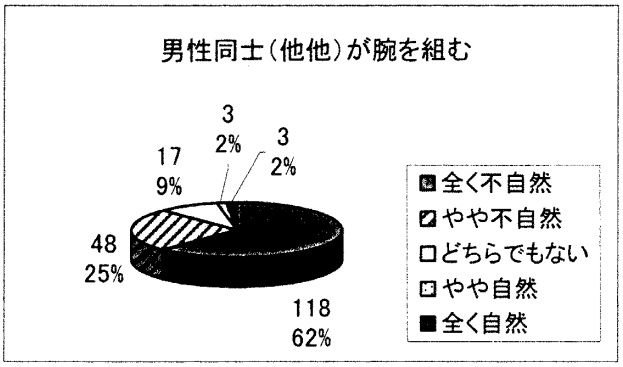

図15　男性同士（他他）が「腕を組む」

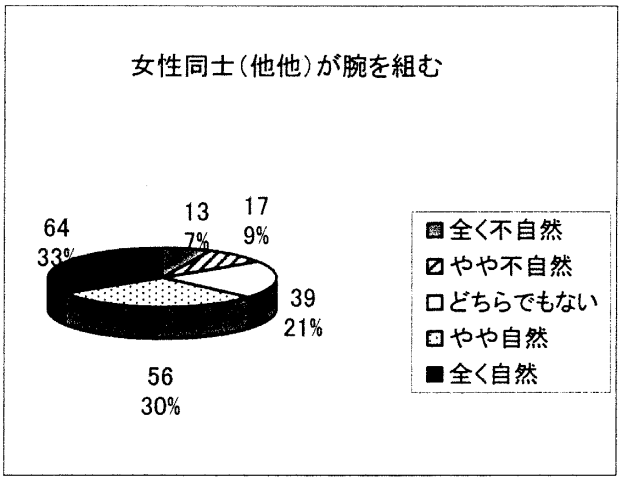

図16　女性同士（他他）が「腕を組む」

次に、同性同士（他他）が「肩を組む」行為に対する許容度について考察してみよう。表11にみるように、同性同士（他他）が「肩を組む」行為については、女性同士の行為に対し、「自然に思う」人が46.6%（88名）、「不自然に思う」人が22.3%（42名）であり、「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為に対する許容度に比べ、許容度が低いことが分かる。しかし、男性同士の行為に対する許容度については、「不自然に思う」人が大幅に減少し、「自然に思う」人の39.2%（74名）にかなり近い割合となっている。その結果、「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為に対する許容度に比べ30%以上も許容度が高まったことになる。女性同士（他他）が「肩を組む」行為に対しては、「手をつなぐ」や「腕を組む」行為に比べ許容度が低くなった反面、男性同士（他他）が「肩を組む」行為に対する許容度は、「手をつなぐ」や「腕を組む」行為に比べ大幅に増加したため、「肩を組む」行為に対する許容度においては、男女差がかなり縮んでいることが分かる（図17、図18）。

表11　同性同士(他他)が「肩を組む」行為に対する許容度

他者行為	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
男性同士	29 (15.3)	38 (20.1)	48 (25.4)	48 (25.4)	26 (13.8)	189 (100)
女性同士	9 (4.8)	33 (17.5)	59 (31.2)	45 (23.8)	43 (22.8)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、( )内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

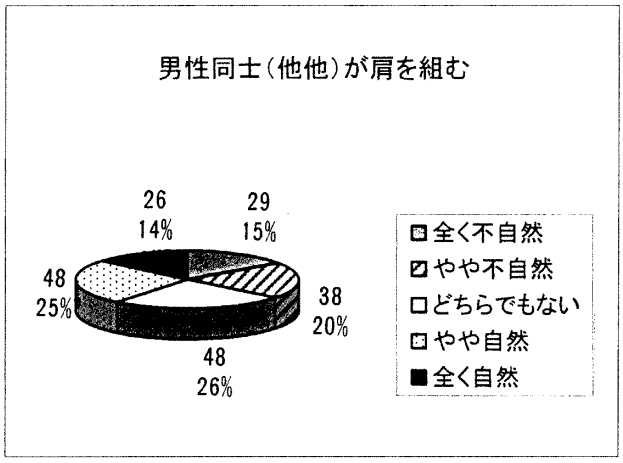

図17　男性同士（他他）が肩を組む

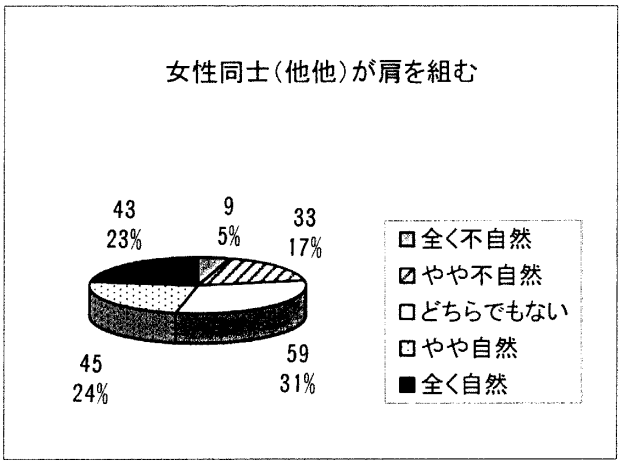

図18　女性同士（他他）が肩を組む

表12と表13は、同性同士（他他）のスキンシップに対するこれまでの分析結果を１つの表にまとめたものである。女性同士（他他）のスキンシップにおいては、「腕を組む」行為がもっとも許容度が高く、男性同士（他他）のスキンシップにおいては「肩を組む」行為がもっとも許容されていることが分かる。とりわけ、男性同士（他他）のスキンシップにおいて、「肩を組む」行為に対して「全く不自然に思う」人の割合が大幅に低下（15.3%）したことには注目すべきである。以上の結果は、女性のスキンシップといえば「腕を組む」行為、男性のスキンシップといえば「肩を組む」行為、といったこれまでのステレオタイプを裏付けるものとなっている。

表12　男性同士（他他）のスキンシップに対する許容度

男性同士の行為	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
手をつなぐ	111 (58.7)	50 (26.5)	19 (10.1)	5 (2.6)	4 (2.1)	189 (100)
腕を組む	118 (62.4)	48 (25.4)	17 (9.0)	3 (1.6)	3 (1.6)	189 (100)
肩を組む	29 (15.3)	38 (20.1)	48 (25.4)	48 (25.4)	26 (13.8)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、( )内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

表13　女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度

女性同士の行為	全く不自然	やや不自然	どちらともいえない	やや自然	全く自然	合計
手をつなぐ	10 (5.3)	20 (10.6)	44 (23.3)	65 (34.4)	50 (26.5)	189 (100)
腕を組む	13 (6.9)	17 (9.0)	39 (20.6)	56 (29.6)	64 (33.9)	189 (100)
肩を組む	9 (4.8)	33 (17.5)	59 (31.2)	45 (23.8)	43 (22.8)	189 (100)

注）表中の数字は人数を表しており、( )内の数字は%を示している。度数の表示には、性別不明の分も含まれている。

また、表14の性別による許容度の相違では、男性同士(他他）が「手をつなぐ」行為や「腕を組む」行為に対する許容度において、男子学生より女子学生の許容度が低く、男子学生と女子学生の許容度には統計的に有意な差が認められる。すなわち、男性同士（他他）が「手をつなぐ」、「腕を組む」行為については、女子学生が男子学生より不自然に思う傾向が強い反面、男性同士（他他）が「肩を組む」行為に対しては、女子学生の方がより寛容的であるといえる。

表14　性別による男性同士(他他)のスキンシップに対する許容度

男性同士のスキンシップ	男子大学生		女子大学生		t
	n	平均 (標準偏差)	n	平均 (標準偏差)	
手をつなぐ*	117	1.74 (1.00)	71	1.45 (0.75)	2.209
腕を組む**	117	1.66 (0.97)	71	1.35 (0.56)	2.743
肩を組む	117	2.95 (1.15)	71	3.13 (1.46)	−0.874

注１）性別表示無しの回答１つを欠損処理し、総数が188となっている。
注２）有意水準の表示は下記のとおりである。
*** p<0.001、** p<0.01、* p<0.05、† p<0.1
注３）５点リッカート・スケールは下記の通りである。
１：まったく不自然　　２：やや不自然
３：どちらともいえない　４：やや自然
５：まったく自然

また、女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度の男女差を表す表15から分かるように、「手をつなぐ」、「腕を組む」、「肩を組む」のいずれの行為に対しても、男子学生より女子学生の許容度が高く表れ、男子学生と女子学生の許容度に統計的に有意な差が確認された。表15の結果を表14の結果と合わせて考えると、男子学生は男性同士（他他）の行為に対してより理解を示し、女子学生は女性同士（他他）の行為に対してより理解を示しているといえる。言い換えると、女子学生は男性同士（他他）のスキンシッ

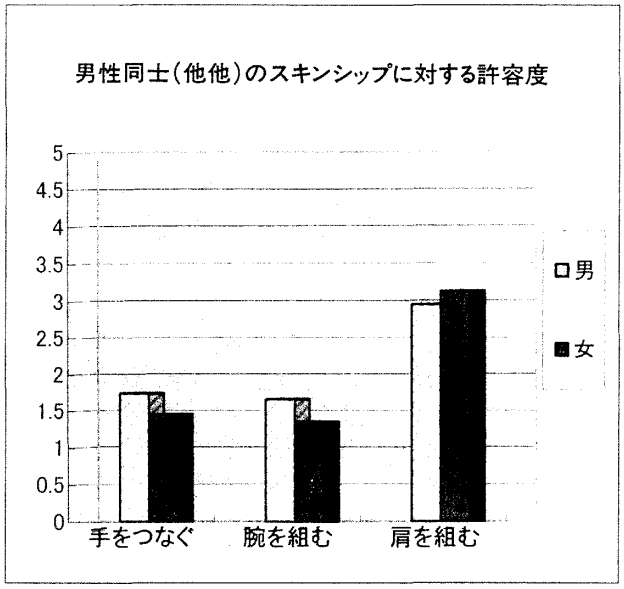

図19　男性同士（他他）のスキンシップに対する許容度

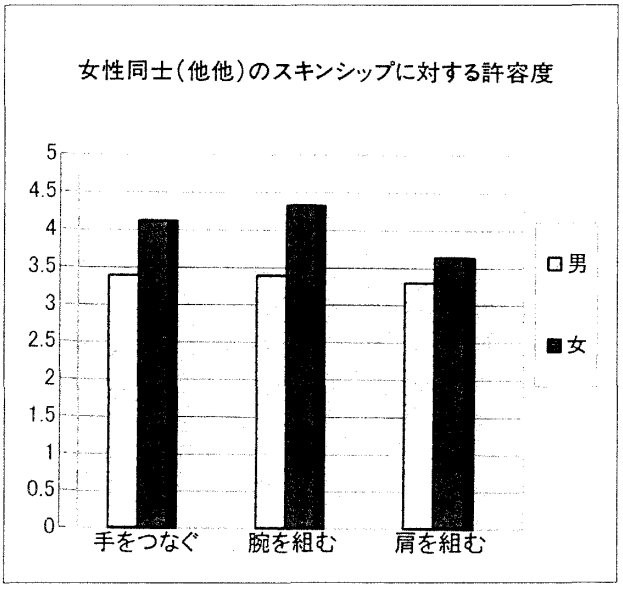

図20　女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度

プ(「肩を組む」行為を除く)に対しては厳しい目で見るが、女性同士（他他）のスキンシップに対してはより寛容的あるということになる（図19、図20)。

表15　性別による女性同士(他他)のスキンシップに対する許容度

女性同士のスキンシップ	男子大学生		女子大学生		t
	n	平均（標準偏差）	n	平均（標準偏差）	
手をつなぐ***	117	3.38 (1.15)	71	4.11 (0.95)	−4.755
腕を組む***	117	3.38 (1.25)	71	4.32 (0.88)	−6.043
肩を組む †	117	3.29 (1.08)	71	3.63 (1.26)	−1.911

注１）性別表示無しの回答１つを欠損処理し、総数が188となっている。
注２）有意水準の表示は下記のとおりである。
*** $p<0.001$、** $p<0.01$、* $p<0.05$、† $p<0.1$
注３）５点リッカート・スケールは下記の通りである。
１：まったく不自然　　２：やや不自然
３：どちらともいえない　４：やや自然
５：まったく自然

4　まとめと今後の課題

本稿では、対人関係の親密さが対人距離に影響を与え、対人距離がさらにスキンシップ許容度に影響を与えるという因果関係を想定し、そこから導かれた仮説の検証を試みた。分析結果によれば、自分と同性の他者との間で、「手をつなぐ」行為、「腕を組む」行為、「肩を組む」行為等について、親密感の薄いグループより親密感の高いグループに属する相手とのスキンシップに対する許容度が高く、「相手に対し親密感が高いほどスキンシップ許容度が高い」とした仮説1は概ね検証されたことになる。

さらに、本研究では、自分と同性の他者間のスキンシップのみならず、他者と他者間のスキンシップに対する許容度についても調査・分析を行っている。まず、男性同士(他他）のスキンシップと女性同士（他他）のスキンシップを比較した場合、男性同士（他他）のスキンシップに対する許容度よりも女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度のほうが明らかに高い結果が出ており、「女性同士のスキンシップに対する許容度が男性同士のスキンシップに対する許容度より高い」とした仮説２も概ね検証された。ただ、「肩を組む」行為については、男性同士（他他）の行為に対しても高い許容度が示され、女性同士（他他）の行為に対する許容度と大きな差はなかった。また、女性同士(他他）のスキンシップにおいては、「腕を組む」行為、「手をつなぐ」行為、「肩を組む」行為の順に許容度が高いが、男性同士（他他）のスキンシップにおいては、「肩を組む」行為がもっとも高い許容項目として示された。さらに、同性同士（他他）のスキンシップに対する許容度においては、男性同士（他他）よりも女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度において男女差が大きく開いている。全体的に、韓国の大学生はコミュニケーションにおいてスキンシップを許容する程度が非常に高く、とりわけ女子学生の親密感の高いグループに属する「親、姉妹、親友」とのスキンシップに対する許容度の高さや女性同士（他他）のスキンシップに対する許容度の高さは注目に値する。

本研究によって得られた結果は、韓国人のスキンシップに対する考え方を理解するための実証データとしては勿論、韓国人との異文化コミュニケーションを図る場面で大いに役立つものであろう。また、韓国に対する異文化理解という側面でも貴重な情報を提供することになる。一方、研究面においても、従来の異文化コミュニケーション理論

をベースに「対人距離」や「スキンシップ」といった新たな視点を提示することで、理論の深化を促す契機となるであろう。本研究における実証分析により、異文化コミュニケーションに関する理解が深まり、多くのコミュニケーション・トラブルが解消され、多文化共生時代の異文化理解がさらに促進されることを期待している。

最後に、今後の研究課題として、対人距離とスキンシップ許容度に関するアジア文化圏内での比較分析や欧米の国々との比較研究を通じ、異文化理解のための理論的・実証的根拠をさらに蓄積していきたいと考えている。

参考文献

Argyle, M., & Dean, J. (1965) Eye contact, distance, and affiliation. *Sociometry*, 28: 289-304.

Hall, E. T. (1969) *The Hidden Dimension*. Doubleday and Company. (日高敏隆・佐藤信行訳『かくれた次元』みすず書房, 1970年)

Hall, E. T. (1976) *Beyond Culture*. Anchor Books, (岩田慶治・谷泰訳『文化を超えて』TBS ブリタニカ, 1979年)

Hediger, H. (1983) *Wild Animals in Captivity*. Butterworth.

Hofstede, G. (1983) The cultural relativity of organizational practices and theories. *Journal of International Business Studies*, Fall.

Hofstede, G. (1985) The interaction between national and organizational value systems [1]. *Journal of Management Studies*, 22: 4, July.

Hofstede, G. (1991) *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. McGraw-Hill International. (岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』有斐閣, 1995年)

Jourard, S. M. (1966) An exploratory study of body-accessibility. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 5: 221-231.

Little, K. B. (1965) Personal space. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1: 237-247.

マレーピアン, A. 著, 西田司・津田幸男・岡村輝人・山口常夫訳 (1986)『非言語コミュニケーション』聖文社.

シーガル, M. H.・ダーセン, P. R.・ベーリー, J. W.・ポーティンガ, Y. H.著、田中國夫・谷川賀苗訳(1995)『人間行動のグローバル・パースペクティブ　比較文化心理学（上巻)』北大路書房.

シーガル, M.H.・ダーセン, P.R.・ベーリー, J.W.・ポーティンガ, Y.H.著、田中國夫・谷川賀苗訳 (1996)『人間行動のグローバル・パースペクティブ　比較文化心理学（下巻)』北大路書房.

池田理知子・クレーマー, E.M. (2000)『異文化コミュニケーション・入門』有斐閣アルマ.

大坊郁夫(1998)『しぐさのコミュニケーション：人は親しみをどう伝えあうか』サイエンス社.

重久剛編(1987)『比較文化論：異文化間コミュニケーションへの糸口』建帛社.

渋谷昌三 (1976)「社会空間の基礎的研究」『心理学研究』(日本心理学会), Vol. 47 (3) : 119-128.

渋谷昌三 (1985)「パーソナル・スペースの形態に関する一考察」『山梨医大紀要』第2巻：41-49.

渋谷昌三(1987)「対人距離の発達的変化に関する投影法的研究」『山梨医大紀要』第4巻：52-61.

曺美庚(2001)「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」『人間環境学入門』中央経済社：100-109.

曺美庚 (2004)「消費者行動に見る文化的側面」『京都学園大学経営学部論集』14(1)：41-58.

曺美庚(2008)「スキンシップ許容度とコミュニケーション距離：日本人大学生の分析結果を中心に」『言語文化論究』(九州大学大学院言語文化研究院), No.23：43-61.

曺美庚 (2009)「韓国人のパーソナル・スペースに関する一考察」『言語文化論究』(九州大学大学院言語文化研究院), No.24：29-45.

曺美庚・李建 (2006)「消費行動の比較と異文化理解：日本と韓国の大学生を中心に」『京都学園大学経営学部論集』16(1)：1-26.

西田司・グディカンスト, W. B. (2002)『異文化間コミュニケーション入門：日米間の相互理解のために』丸善株式会社.

林吉郎 (1994)『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社.

本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッファ (1994)『異文化理解とコミュニケーション 1：ことばと文化』三修社.

本名信行・秋山高二・竹下裕子・ベイツ・ホッファ・ブルックス・ヒル (1994)『異文化理解とコミュニケーション 2：人間と組織』三修社.

三井宏隆(2005)『比較文化の心理学：カルチャーは社会を越えるのか』ナカニシヤ出版.

八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美(2001)『異文化コミュニケーションワークブック』三修社.

山口修・齋藤和枝編 (1995)『比較文化論：異文化の理解』世界思想社.

Interpersonal intimacy and allowance level of physical touch: Based on a survey of university students in Korea

CHO Mikyung

The goal of this paper is to improve cross-cultural understanding about Korean culture by analyzing a survey of university students in Korea. Two hypotheses were derived from previous studies about the relation between intimacy and interpersonal distances. One is that a feeling of closeness affects the allowance level of physical touch (or "skinship"). The other is that the allowance level of physical touch (or "skinship") between females is higher than that between males. These two hypotheses were statistically supported based on the survey data. In addition, the results suggest that on the whole Korean students tend to allow high level of physical touch (or "skinship") in communicating with others, and especially female students have a stronger tendency to allow the physical touch (or "skinship") between females. The implications derived from the survey will help non-Korean people to understand Korean culture and to communicate with Koreans effectively.